讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

文化通心

BUNKA TSUSHIN 2023春 No.117

3年ぶりの研修旅行

12月にやっと実現した晴友会の研修旅行。初日は、途中、東福寺の通天橋の紅葉を楽しみ、京都国立博物館の茶の湯展へ。２日目は、新しくなった大阪の藤田美術館と堺市の南宗寺やさかい利晶の杜を見学。設立30周年を迎えた財団の活動も新たな局面を迎え、気持ちを新たにした旅となりました。晴友会の皆様にも改めてご協力承りますようお頼みいたします。

●新たな文化を産み出すこと。
和田邦坊研究ヒストリー　西谷美紀（炙まん美術館 学芸員）
身体表現と時間芸術の役割　三木優希（Eclogion代表）
ゆれ動くソノトキ 内側の対話、外側の対話。　吉田亜希（流転 RUTeN）
●3月から5月までの茶華道情報／財団からのお知らせ

発行：公益財団法人 中條文化振興財団
〒760-0017　高松市番町2丁目1番12号
TEL（087）826-3355　FAX（087）826-2212
2023年春号　No.117　3月1日発行（季刊）

新たな文化を産み出すこと。

財団の助成金事業は、30周年を迎えました。これまで沢山の地元の文化の発展に協力させて頂き、感謝に堪えません。それぞれ独自に温めて来られた研究やパフォーマンスの作品を世に問うといった瞬間にご支援できる事は、大きな喜びでもあります。今回はそうした活動の一部をご紹介いたします。そしてまた次の新たな文化の始まりの灯火となれば、これ以上の喜びはありません。

和田邦坊 研究ヒストリー

和田邦坊リサーチプロジェクト
炙まん美術館 学芸員
西谷美紀

はじめに

香川県高松市出身。生粋の讃岐っ子の私は、龍谷大学文学部史学科国史学を卒業後に学芸員となりました。日本史を専攻していると「歴女だね」と言われがちですがアニメやゲームをきっかけで日本史が得意になったわけではありません。みかん農家をしていた祖父ともに巡った古墳探検や郷土史研究家の祖父とともに楽しんだ時代劇のテレビタイムが今の私を作り上げた時間でした。今回は、和田邦坊について熱く語るというよりも助成事業をきっかけにパワーアップした私の学芸員人生について綴りたいと思います。

そうだ、助成金を申請しよう！

２０１６年、私は生まれて初めて個人で助成金を申請しました。仕事として助成事業の申請をすることは何度もありましたが、個人の研究では初めての挑戦でした。学芸員の研究活動は、必ずしも所属先で活かすことができる事業ばかりではありません。もちろん個人の研究とすり合わせて事業化していくのも学芸員の腕の見せ所でもありますが、当時の私は激務に追われていてその余力もありませんでした。心身ともに疲れ果てて、文字の判読ができなくなるほど体調を崩した時もありました。その絶不調のときに、文化通心を手にして「そうだ、助成金を申請しよう」と思い立ったのでした。矛盾するような行動だったと思うのですが、仕事だけの日々から脱したいという思いとともに、いままで積み重ねてきたことをアウトプットしたいという欲求に駆られたのでした。嬉しいことに採択が決まり、多忙な日々とともに調査活動が始まりました。自分の拙い言葉をかき集める作業は、苦しさもありましたが仕事以外のことに集中できる時間は妙にリフレッシュできたように思います。

また、口コミやネットワークのおかげで報告書の存在を知ってもらえるようになり、新聞やテレビの取材も受けるようになりました。反響の大きさを振り返ると、もっと知りたいと思っていた人たちよりも初めて邦坊を知ったという人たちの方が香川の新発見として注目してくれたように思います。私自身も点と点がつながるワクワク感とともに日常にあるものに対して新しい視点を見出すことが研究の醍醐味だと感じています。

和田邦坊旧蔵資料の写真コレクション

数珠つなぎの出会い

「図書館に献本する！」それが１番の目標でしたが『和田邦坊デザイン探訪記①②』を発表するとたくさんの出会いがありました。本屋ルヌガンガに託していた在庫は、ネット通販などでも販売されており、全国各地から注文が入ったと聞いています。私だけの発信では叶わない人たちにも届いたことは嬉しかったです。また、東京で活躍する南陀楼綾繁氏（編集者）とも出会いがあり、２人でトークイベントに登壇する機会もありました。思い越せばこのイベントで大場晴夫氏（香川大学ＡＩ邦坊の共同研究者のひと

左：和田邦坊デザイン探訪記② ～東京・香川編～（2019年）
右：和田邦坊デザイン探訪記①（2017年）

り）とも知り合うことができました。また、日本郵政の方ともご挨拶する時間があり、ご当地フレーム切手（和田邦坊特集）の制作事業にも繋がりました。

「まいまい亭」の女将さんもたくさんのご縁をつないでくれたひとりです。気さくでお話上手な女将さんは、接客をするなかで「ここぞ！」と思うお客様にはいつも美術館の企画展や和田邦坊のことを紹介してくれていました。神藤秀人氏（雑誌編集長）もお店で和田邦坊を知った人物です。香川県を特集する前の出会いだったそうですが、女将さんが炙まん美術館や私の活動を紹介してくれたおかげで『d design travel（香川本）』の紙面の中でも大きく和田邦坊を取り上げてもらいました。『d design travel』は、都道府県ごとに出版している観光ガイドブックで、編集者の厳しい眼で選んだ情報を掲載しており、本物志向の読者が多い雑誌です。雑誌のイメージと和田邦坊のギャップがあるようで「どうしてd design travel（香川本）で邦坊の取材が入ったの？あなたが売り込んだの？」という質問もよく受けますが、実は女将さんの推薦で繋がったご縁でした。残念なことに「まいまい亭」は、この冬44年の歴史に幕を閉じました。知り合いのSNSで閉店を知りましたが、私だけでなくお店からご縁をいただいた人も多いはずです。女将さんには最後のご挨拶ができないままでしたが、改めてご縁に感謝申し上げたいと思います。

左：2022年、IKUNASの和田邦坊特集号のイベントにて担当編集者とツーショット
右：d design travel（香川本）の紙面。和田邦坊の作品で溢れたページ

左：2021年、コトバスから依頼を受けて監修したラッピングバス
右：2020年に発行した和田邦坊のフレーム切手。発売から話題を集め3日で増刷しました

研究活動を支えるネットワーク

報告書の作成は、大池翼氏（デザイナー）と宮脇慎太郎氏（フォトグラファー）というクリエーターたちにも支えられています。最初は「テキストだけのモノクロの冊子にしたい」と相談していましたが「作るだけじゃだめだ。たくさんの人に手にしてもらえるように工夫しなきゃいけないよ」というアドバイスを受け、初めてデザインを意識するようになりました。恥ずかしながら、それまでは情報さえあれば報告書として成立すると思っていたので私にとっては大きな意識改革でした。そして、デザイナーのおかげで表紙だけでなく紙面のレイアウトも読み易くなり初めて知る人にも手に取りやすい報告書を作ることができました。また、素人の撮影ではなくプロが撮った写真を使うことで作品に対しての敬意が生まれ、画像が持つ資料的価値を意識することができました。

おわりに

和田邦坊研究を通じて私の学芸員人生は、間違いなくパワーアップしました。学芸員は、何でもできるスキルも求められがちですが専門という武器も必要だと考えています。様々な職場と分野で仕事をしてきましたが、ひとつのテーマに向き合う難しさや歴史や美術以外の異分野に繋がる面白さを知ると専門（武器）の使い方も分かるようになってきました。

邦坊は、時事漫画家、小説家、農業学校の教員、讃岐民芸館初代館長、商業プロデューサー、画家など、どこを取り上げても研究しがいのあるキャリアを持った人物です。多彩な活躍のおかげで、私自身も様々な分野の勉強をすることができています。例えば、新聞漫画の資料からは当時の世相や政治を学ぶことができ、小説の作品を読むと物語から昭和の男女の価値観、職業観、流行したファッション、文化などを知ることができます。絵画作品をみると、賛にある俳人たちの作品や句集を読み、絵付けした茶碗を手にすると民芸や窯元、陶芸の歴史などに触れることができます。一番身近なパッケージデザインは、関係者たちを訪ねてリアルな当時のやりとりを記録し、普段手にしないようなデザイン雑誌を読み漁るという経験もしました。このように、膨大に残された資料や作品のおかげで邦坊に関する新発見が続いていますが、この研究活動を通して私自身も新たな学びを多く得ることができたと考えています。飽き性の私にぴったり…というわけではないのですが、これからも飽きる暇もなく調査活動に邁進する日々が続きそうです。

左：2023年に監修を担当した香川大学博物館の特別展
右：炙まん美術館の企画展「邦坊青春グラフィティ」

身体表現と時間芸術の役割

Eclogion代表
三木優希

Eclogion【エクロジオン】の産み出す踊りは、人間に必要な「創造」の循環と、それに付随する生態系を肥沃にするという役割があることに気付きました。まるで絶滅危惧されている海鳥のように、人々に風向を知らせ、鳥を見て飛行機を作り出すような「発想の連鎖」をも生み出す。これからも未来へ孵化する身体を追求し、作品を産み出し続け、「生きること」が私たちのダンスであり続けたいと思っております。

2020 「pb」(ピービー) 塩江美術館

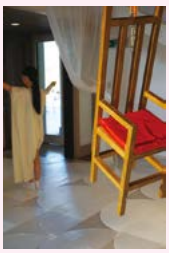
二〇二〇年の一作品目は、古楽器であるヴィオラ・ダ・ガンバ、現代の電気の力で音を出すベースなどを使用し、現代と古代そして「卵」というキーワードをモチーフに、融合しないものを融合させていき、天地がひっくり返るような全く内容の違う構成の作品を、二日に分けて上演。安部公房「鉛のたまご」から着想を得て、現代と古代の「愚かなものの集まり」を、舞台上に表現した。

タイトルである「pb」は鉛の元素記号であり、愚者の対義語は賢者であることや、愚かなものは無理矢理プログラムされたものを作り出そうとする。という言葉は、作品のイメージを膨らませていった。

創作過程で塩江美術館の構造を生かした空間演出、繊細な調弦や超絶技巧などの奏法、古い本の間に挟まっていたような貴重な楽譜などを用いて、弾き手がいなくなり一度絶滅してしまった楽器が復活したことも作品内に盛り込んだ。コントラバスや六弦エレキベースは現代的な手法によるアレンジを加えて頂いたり、効果音のような弾き方も実施。

交わることのない時代や楽器の種類、音域などをあえて作品内に持ってくることにより、現代でしか表せない作品を制作することが出来た。

造形作家の長野由美さんの過去の作品は、海外にも出展したことのあるものを使用させて頂き、舞台上は、作品のための美術のみではなく、作家さん本人の生きる上でのテーマともリンクさせ、出演することで、空間を主導しているのが誰なのか、制作中の身体を舞台美術として完成させることが出来た。



振付は、バロックダンスの型や、ヒップホップの型、日舞の型と対比しコンテンポラリーダンスの型のない踊りなど、神楽の舞なども効果的に使用した。

コンテンポラリーダンスの公演は、高松市ではあまり行われておらず、境目の曖昧な舞台表現は、芸術的な価値だけでなく、幅広い表現方法があることなどを、市民の方に知ってもらい、固定概念を崩したり、新たな気づきや世界観の共有などを目指し、斬新且つ独創性の強い舞台を創作出来たと感じる。また、GOTOを利用した宿泊の促進、還元も行うことが出来、感染症対策を行った上での舞台事業の方法なども模索することが出来た。映像でも一作品を作るという形は、コロナ禍であることがきっかけの舞台の新たな取組になった。

2021 「Dilemma」(ジレンマ) KOHAKU

二〇二一年の二作品目では、さまざまな融合によって生じた「ジレンマ」自体を作品にし、古楽器と現代楽器の融合した楽譜を作曲家に作ってもらった。この楽譜は複雑なリズム、右と左がかけ合うような作りになっており、その中で起こるジレンマも作品になっている。

「pb」で行った天と地の二公演を記録編集し、同じ作品内で構成が入れ替わることにより見えてくる、視点の変化や立場の変換を映像にて可視化し、上映しながら、変化し続ける舞台を提示した。コロナ禍で作品を上演出来ないアーティスト達、行動を制限された子ども達など、現代ならではジレンマに着目して作品を制作していく中で、過去と現代に生まれてくる、表現の差異を解体し、コンテンポラリーダンス特有の何者にも属しない目線で作品制作を目指した。また、作曲家の港大尋を加え「Dilemma」をテーマにオリジナル楽曲を制作をした。

この公演では、バロックダンスを段階的に崩して踊ったり、舞踏の要素を混ぜ込んだり、フロアムーブメントと美術を

Photo by Shintaro Miyawaki

Photo by Shintaro Miyawaki

Photo by Shintaro Miyawaki

掛け合わせたり、日常的な身体を舞台にあげたり、言葉遊びなども交え、ダンサーが声を出すだけでなく、歌を歌う身体をも踊りにするような試みも行った。

マスクをしながらも実際に山に行って踊っている映像を投影しながら、ダンサーは場所に行った時の記憶を身体に呼び起こし、時間軸や記憶を用いた振り付けなども展開させた。映像は香川だけでなく、兵庫県の舞子公園など、コロナ禍での制作で実際にアーティストたちが苦悩し、選んだ踊り場所なども盛り込まれ、2Dの映像のダンサーと音楽家の生演奏など、演出にもさまざまなジレンマの要素が入った。

本物の音（水が落ちる音）をリアルタイムで拾い、音と身体を美術にしてしまうことで、予測のできないリズムを作りだすなど、音と美術のコラボレーションもクオリティの高いものが出来た。

最近のコンテンポラリーダンスも新しいムーブメントはあまりなく、概念みたいなものがついてきていて、それを脱却した世界観を出したい。というような意図も作品に昇華することが出来たように感じる。少し複雑で、画面に描かれていない作家性も含め、その作品が描かれたバックグラウンド、社会背景なども鑑み、生きる身体そのものが作品として、提示ができた。見て頂いたお客様にも新たな動きが産まれ、触発するような作品となり、記憶に残り、年月が経ってもあの時のはこういう事か。という気付きの為の仕掛けを組めたように思う。

さらに、まち宿とも協力しレジデンス期間の安全を確保し、コロナ禍でも安心して作品を創る事が出来た。

この作品は高知、東京も企画内に盛り込み、新たに色々な土地へ向けて作品や活動を知っていただく機会ができ、充実していた。舞台はモノとして残るものではないけれど、今後の発展性も含めあらゆる試みがこのコロナ禍に行えたことがとても有難く感じた。

2022 「Trilogy」（トリロジー） 栗林山荘 絶景劇場

二〇二二年の三作品目「Trilogy」は、分断と融合その先には一体何があるのだろうか？という投げかけから始まり、タイトルの意味でもある三部作として三年間作ってきた土台の総集として、作品を制作。融合をしたものがそれぞれの良さをより引き出せるような形を目指し、過去、今を重ねることで作品が未来へつながるような意味合いを持つよう創作を行った。

「移り変わる時間、蠢きあう身体、3つの作品が新たな1つに。カコを連れ イマの身体がミライに孵化する。」

○一部「The past」
●二部「The present」
◎三部「The future」

いくつもの丸が、例えば誰かの人生であったとして、時に揺れたり、時に他の誰かに触れたりして、進行していく。星同士がぶつかったり、散り散りになったりを繰り返して星が誕生するように、くっついては散ることを繰り返して膨らんでいく創造物。それらのイメージを踏まえ、美術家の長野由美さんの美術に着想を得て、ダンスと音楽を通して、連続する未来を可視化する。

三年間継続して作品を制作することで、一年ごとに作品の深さが増し、公演に関わってくれる方が増えた。会場を固定せず行うことにより、色々な場所で色々な可能性を探求することができた。

こうして香川県で作られた作品を、今後は日本のマーケット、そして世界へと発信できるよう、資料としても様々なものをアピールの材料として、「作品を作る」という技術や、知的財産をこの土地の財産として提示していける土台が築けた。作るだけでなく、舞台に興味を持ってくれるアーティストの育成、裏方の育成を継続させていくことが重要になってくると考える。

コンテンポラリーダンスは、こういった劇場での試みが本当に大切で、この街に継続して必要なものだと改めて感じる。そして、創作過程にある価値あるものは、すぐには表に現れない。当たり前だが、三年間は一年間とは違う。時間芸術とは一つの公演時間だけで完結しないことも表現の一つとして提示できる。コンテンポラリーダンスが軸になることで起こる出来事。今まで世の中になかったものを作る意味などが全て尊く感じる。

コロナ禍、やる意味があるのか？を私たち自身も考えた瞬間はあったし、「いらないもの」と捉える人も少なくなかった。しかし、こんな時だからこそ残せるものがある。アーティストであり続けることを支援して頂き、活用ではなく、創作の手助けをして頂いた。授与式で受け取る側なのに「感謝している」と言葉をかけて頂いたのが、本当に忘れられない。

作品に関わって頂いた皆様、足を運んで頂きました皆様、そして支えて頂きました財団の皆様、本当にありがとうございました。

Photo by Shintaro Miyawaki

Photo by Shintaro Miyawaki

Photo by Jun Ozaki

Photo by Shintaro Miyawaki

ゆれ動くソノトキ
内側の対話、外側の対話。

流転 RUTeN
吉田亜希

おかげさまで２０２２年11月12日に現代サーカス公演―ＳＯＮＯＴＯＫＩ―を無事に終演することができました。同年８月よりリサーチ、打ち合わせやリハーサル等に着手し、現地には２日半滞在し３公演を行いました。今回、会場になった三豊鶴Ｔｏｊｉは本来ゲストハウスとして稼働しています。

なぜ環境の整った劇場ではなくこの場所で？と思われたかもしれません。普段、劇場に足を運ばない方でも日常に近いところに現代サーカスを発生させられたらより身近に感じてもらえるのではないかという考えでした。

また施設内回遊型の鑑賞スタイルで、サーカス器具やテクニックを環境や衣装の布、照明を含めた空間づくりと融合させて客席とステージの境界をなくし観客が作品の中に入るようなどこかワクワクする体験につなげるよう創作しました。

なぜ衣装・身体・空間から現代サーカスを？　多方向からの考えでより多くの人を巻き込む

少し前まではパフォーマンス活動の中心は東京で、東京でなければ難しいという考えが一般的でした。ですが、３年前に香川に移住し、協力してくださる方々のおかげで、地方に住みクリエイションして国内外で発表することが可能になりました。

そんな中、２０２０年にパンデミックが起こり突然、不要不急な活動への制限がかかりました。そして〝大勢でのリアルなコミュニケーションができない〟という状況で多くの方が便利なインターネット上で自分の良い時間をもつようになりました。

しかし一方では、多くの情報の中で慌ただしく過ごしていると通りすぎてしまう〝振り返る時間〟や物事をリアルに〝感覚で感じる時間〟がより心豊かに過ごすには必要なのではないかと感じることもありました。何かできないか？そうだ！私たちがやってきた現代サーカスは不要不急かもしれないけれど、多くの人を巻き込み心が動くきっかけになり日常の考えや感覚を豊かにできるはずだと考えました。普通は視覚的な要素が強いですが、多くの方がもっと五感で感じるため、サーカスの身体性だけでなく多方向からのアプローチが必要で、衣装・身体・空間から現代サーカスをつくる〝流転〟の活動を始めました。今回の公演で言えば香川の日常に多くある竹で空間に香りをプラスし、パフォーマンス中に触れたり踏んだりした時には音がなり、素材を動かした時には風が起こりそれを肌で感じる。これらは風土を公演中に感覚で感じられ懐かしさや安心感に繋がったのではないでしょうか。更に多方向からのアプローチは作品のオリジナリティにもつながります。

パフォーマンス後に座談会の時間を作り、コミュニケーションや今後の作品づくりのクオリティ向上にもつながる公演に

初めての現代サーカスをお孫さんと鑑賞してくださった方がいました。会場にメンバーもオーナーさんも何かわからないオブジェのようなものがあったのですが、その方が〝ぽん菓子つくる道具ね、懐かしい〟と教えてくださいました。公演についてのフィードバックは、もちろんですがこう言った些細な対話からコミュニティができていくのだと実感した時間でした。さっきまで知らなかった観客同士もそれを引き金に話し始め、時間の共有を通して結びつきました。その後は和やかに公演についての感想や疑問などのフィードバックを多くの方からいただき、今後につながる貴重な時間となりました。

今回の公演を振り返り、交流の場をつくることは公演のひとつの役割であり、情報の多いご時世、時には一つのことに集中して無心になることで日常から解放され心が軽くなる時間や空間をつくることは文化芸術活動のひとつの役割かもしれないと思われます。

今後もオリジナルの現代サーカスとしての強さを探求し、共有する時間を楽しめる作品づくりを目指し香川から国内外に発信していきます。この度はその第一歩を踏み出せる機会を支援していただきましたこと心より感謝しております。

Photo by 木村優花

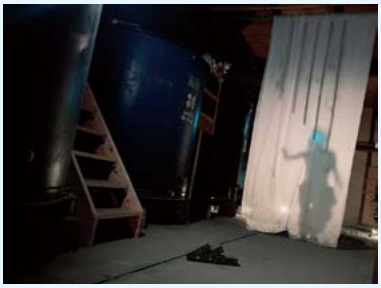


Photo by 木村優花

Photo by Sora Aono

お茶の風景（19）

弥生三月ひなまつり

水辺の祓い信仰が時代とともに形を変えて、今様のひなまつりに定着してきたのですが、西讃の仁尾町には戦国時代の落城物語にまつわる独特の風習がありました。

物語の発端は、土佐の雄・長宗我部元親が四国平定を目指した讃岐攻略から始まります。燧灘にむけて豊かにひらけた里の仁尾城（仁保城）も長宗我部軍に攻め入られ、城主の細川頼弘があえなく討ち死したのは三月三日ひなまつりの日だったと言います。国破れて山河あり。悲惨な戦場が長閑な田園風景に戻り、青空の下、桃の花びらが春風に誘われて流水に舞い散る、といった美しい光景も見られたことでしょう。

城主の死を悼んだ城下の人々は華やかな上巳の節句（ひなまつり）を遠慮して、端午の節句と併せて八月朔日に男女の子供たちを祝ってきました。近代化の中で途絶えた郷土の風習は、最近、町をあげての八朔まつりに復活し、雛人形と武者人形を一緒に飾って賑わっています。

お菓子な話　その54

讃岐うどんも骨付鳥もおまかせ

駄菓子屋を覗くと見かける「うまい棒」。

そんな全国的なお菓子に並ぶ讃岐のお菓子をご存知ですか？

その名も「風味棒」。

原材料は乾燥させたとうもろこしの皮と胚芽を取り除いた胚乳部分のみを粒状に粉砕したコーングリッツ。

味は讃岐うどん風味と骨付きどり風味の2種類があります。

讃岐うどん風味棒には、うどん出汁や昆布のエキスが、骨付きどり風味棒にはチキンエキスなどで香味しているようです。

サクサクの食感と出汁や香辛料の香りがいいですよね。

お味は食べてのお楽しみです。

子供のおやつやお酒のあてに、帰省のお土産に買ってみてはいかがですか。

財団行事予定（3月～5月）

休館日水曜日

お申込みは財団まで。急遽中止になる事もあります。

3月

◆ **書道教室**　毎月第1・第3金曜日
森本義人先生
3月3日（金）・17日（金）午前10時～12時

◆ **ヤングヤング**　山下純子先生
3月4日（土）・18日（土）　午後1時～

◆ **懐石講座**　三友居　山本勝先生
3月7日（火）午前11時・午後3時

◆ **和菓子講座**　毎月第2金曜日
高橋初乃先生
3月10日（金）午前10時～12時

◆ **茶室 de 若人茶会**
3月19日（日）午前9時～午後3時
席主：大手前高松中学・高校茶道部

◆ **月に一度の喫茶室**　毎月第3火曜日
3月21日（火）午前10時～午後2時（受付）
自由なお時間にどうぞ。（ランチは要予約）

4月

◆ **書道教室**　森本義人先生
4月7日（金）・21日（金）午前10時～12時

◆ **ヤングヤング（子供茶の湯教室）**
毎月第2・第4土曜日　山下純子先生
4月8日（土）・22日（土）　午後1時～

◆ **4月月釜　五人様茶会**
薄茶とアレンジフラワー、東京で活躍中の息子さんとの協演です。春爛漫の頃、花と共に過ごす一日を皆様に。
日時　4月9日（日）
処　美藻庵　晴松亭（当財団茶室）
薄茶　武者小路千家　竹井守恵
花　フラワーデザイナー　竹井陽二郎
会費　6,000円（薄茶・花・点心席）
入席時間（各席6名・2時間15分を予定）
第1席　9時　第2席　10時30分
第3席　11時15分　第4席　12時45分
第5席　14時15分　（各席A席・B席）
申込 電話受付 3月13日（月）10時～

◆ **和菓子講座**　高橋初乃先生
4月14日（金）午前10時～12時

◆ **バッハの陽春コンサート**（お茶･お菓子付）
4月16日（日）11時・14時　3,000円
出演：アンサンブル・フィノ

◆ **月に一度の喫茶室**
4月18日（火）午前10時～午後2時（受付）
自由なお時間にどうぞ。（ランチは要予約）

5月

◆ **懐石講座**　三友居　山本勝先生
5月2日（火）午前11時・午後3時

◆ **5月月釜　五人様茶会**
初風炉の季節、心地よい茶室でご一緒に。
日時　5月7日（日）
処　美藻庵　晴松亭（当財団茶室）
濃茶　表千家流　美澤宗包
薄茶　石州流讃岐清水派石州会　野口宗眞
会費　6,000円（濃茶・薄茶・点心席）
入席時間　4月五人様茶会と同様
申込 電話受付 4月10日（月）10時～

◆ **和菓子講座**　高橋初乃先生
5月12日（金）午前10時～12時

◆ **ヤングヤング**　山下純子先生
5月13日（土）・27日（土）　午後1時～

◆ **月に一度の喫茶室**
5月16日（火）午前10時～午後2時（受付）
自由なお時間にどうぞ。（ランチは要予約）

◆ **書道教室**　森本義人先生
5月19日（金）・26日（金）午前10時～12時

「晴友会」更新のお知らせ

友の会「晴友会」の更新時期が参りました。
更新をご希望の方は同封の郵便振替用紙にて年会費3,000円をお振込み願います。

期間　2023年4月1日～2024年3月31日

茶華道ガイド

急遽中止等の変更となる場合があります。

茶道裏千家淡交会高松支部　TEL（087）841-0605

〈淡交会高松支部月釜〉　前売券のみ・入席時間指定
大西・アオイ記念館　800円　9:30～15:00
4/2　席主：百々路宗恵
6/4　席主：横倉宗翆

石州流讃岐清水派石州会　TEL 090-2826-9229

4/9　創立86周年記念茶会　第1席席主：磯部宗元、
第2席席主：金澤宗保、嶋﨑宗代、地下宗利、馬場宗里
玉藻公園披雲閣　1,500円　9:00～15:00

武者小路千家香川官休会　TEL（087）862-8574

〈香川官休会月釜〉　無量寿院（御坊町）　800円　9:00～15:00
3/5　席主：多田妙容社中
5/7　席主：嶺松会

大西・アオイ記念財団　TEL（087）880-7888

〈大西・アオイ高校茶会〉　大西・アオイ記念館　400円
3/11　席主：高松桜井高校茶華道部　10:00～14:20（5席）
3/26　席主：三木高校茶華道部　10:00～13:30（4席）

高松市香南歴史民俗郷土館　TEL（087）879-0717

〈由佐城月釜茶会〉　前売券のみ・入席時間指定
第2研修室（和室）　600円　9:30～（全6席）
3/19　席主：寺岡宗由（茶道石州流宗家高松会）
4/16　席主：村川宗月（表千家真子宗博社中）
5/21　席主：川原宗津（裏千家）

料亭二蝶　TEL 0120-86-0220

5/17　季楽茶会（予約制）　席主：山本守蝸（武者小路千家）
料亭二蝶　10,000円　9:00～（全4席）

財団からのお知らせ　中條文化振興財団

「若人茶会」の新たな試み

茶室 de 若人茶会・第1弾

来たる3月19日、日曜日に、大手前高松中学・高校茶道部のお茶会が、財団であります。お客様として参加ご希望の方は、財団までお問い合わせ下さい。

ご存知のように3年に渡るコロナ禍は、様々なイベントの継続を断ちました。高校生を中心に、本格的な茶会をする機会を持ってもらおうと始まった「若人茶会」も同様です。

茶の湯に限らず、伝統文化の現場では、それぞれに次の担い手をどう育てるのかという問題に直面しています。

財団でも、若者の茶の湯の環境を支援するために、何が出来るのか新しい方法を模索して参りました。

先ずは財団の本格的な数寄屋造りの茶室を高校の茶道部等に、無料で開放して、お稽古やお茶会に使って頂こうと考えました。

茶室の構造や使い方のお話、露路や、つくばいの使い方や、躙口の入り方。小間でのお点前など、様々な体験がしていただけます。

ご希望で、もし対外的なお茶会をされるならサポートもさせていただきます。もちろん、学校のご都合で、お客様の入れ方を制限するのも自由です。

茶会には、お客様が必要ですので、もし可能であれば、生徒さんの友達やご家族。また、他の高校の茶道部の生徒さん達との交流をしていただければ、楽しい思い出にもなると思います。

若人茶会の対象は、小学生、中学生、大学生の皆様も同様です。

つきましては、学校茶道に関わりのある先生方や、各学校の担当者。あるいは生徒さんご自身でも、ご希望の方がいらっしゃいましたら、遠慮なくご相談ください。

おいでまい香川
香川県内の様々なイベント情報を随時更新中!
https://oidemai.kagawa.jp/

編集後記

雪混じりの風が、北から西から吹き付ける・・・そんな寒さにも負けず蠟梅の小さな花が芳香を放っている。そのうち、紅梅白梅の花便りも聞かれるようになり、春はそこまで来ているとの思いにふけっていると、早くも桜の開花日予想がニュースで流れた。気が早いなと思いつつも暖かさにつられてこれから色んな花が咲いていくのを想像すると心が明るくほっこりする。

約三年、籠り気味だった世の中も元に戻りつつあります。と言ってもコロナウイルスがなくなった訳ではないので感染防止対策を取りながら、私たちも季節に誘われて咲いていく花のように動き始めたいと思っています。

［声・情報お寄せください］
〒760－0017
高松市番町二丁目一－十二
公益財団法人 中條文化振興財団編集部
TEL（087）826－3355
FAX（087）826－2212
info@chujo-zaidan.or.jp

「文化通心」第118号は2023年6月1日発行です。